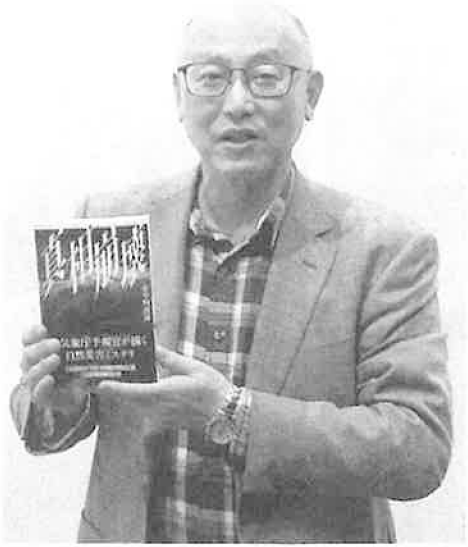
元甲府気象台の小早川さん 作家デビュー

思い出の山梨が舞台



デビュー作「真相崩壊」を手にする小早川真彦さん　＝東京都内

元気象庁職員で、甲府地方気象台などに勤務した小早川真彦さん(61)が山梨を舞台にしたミステリー小説「真相崩壊」(論創社)で作家デビューした。土砂災害によって現場がなくなった殺人事件の謎を解き明かすストーリーで「ぜひ山梨の人に読んでほしい」と話している。　〈横内史喜〉

小早川さんは大阪府出身で、1984年に気象庁入庁。2005年から4年間、甲府地方気象台に技術専門官として勤務し、気象の観測や予報などに従事した。高校時代から小説を書き始め、さまざまな賞に応募してきたといい、19年に気象庁を退職して執筆活動に専念。22年に「論創ミステリ大賞」の最終候補となり、出版のオファーを受けた。

小説は山梨県内の架空のニュータウンで起きた一家殺害事件がテーマ。台風による土砂災害が起き、現場が跡形もなく消えてしまった事件の真相に迫るストーリーだ。「気象庁での経験がなければ書けなかった小説。長年の夢がかなってとてもうれしい」と話す。

初めての地方勤務となった山梨時代のことが印象深く、現在もサッカーJ2のヴァンフォーレ甲府を応援していることなどから舞台に選んだ。賞に応募したときは山梨をイメージしつつ、架空の県名を使っていたが、出版に合わせて実際の地名を使うこととし、富士山や笛吹川なども登場する。

現在構想中の次回作でも山梨が登場する予定という。小早川さんは「気象関係のミステリー小説はあまりないので、経験を生かして面白い作品を書いていきたい」と話している。

かいじネットワーク